『建築コスト研究』を振り返って―第100号発刊―

本誌編集企画委員長　奥田 修一
（株式会社竹中工務店　特命理事）

1　はじめに

建築コスト管理システム研究所の機関誌『建築コスト研究』は1993年４月の創刊から本号で100号を迎えた。季刊なので年４回、25年間休みなく発刊されたことになる。筆者は五代目の編集企画委員長として85号から編集企画を担当しており、その前も専務理事として55号から関係しているので100号のほぼ半分近くの号に関わってきたということになる。

今回、100号という記念すべき号を発刊することを機に、これまでの機関誌の内容を振り返って、どのような役割を果たしてきたかなどについて考察してみたい。

発刊当初の考え方を知る手がかりとして、コスト研設立10周年に当たる40号において「機関誌『建築コスト研究』を振り返って」という紙上座談会が行われている。その中で初代編集長の清水令一郎氏と二代目の照井進一氏が機関誌に対する考え方などを述べている。建築コストに関する研究所の機関誌ということになれば、ある程度堅苦しくなることは避けられないと考えていたようだが、少しでも読みやすくする工夫として座談会や対談を取り入れるようにしたことが述べられている。初代理事長が研究者の古川修先生だったこともあり、機関誌の論文も一定の水準を保つべきというのが関係者の共通認識だったことが窺える。36号に紹介された『建築コスト研究』の印象に関するアンケート調査結果では「研究所の機関誌らしい」と「論文等が多く、堅苦しい」の二つの意見で過半を占めている。この本誌の基本的な性格はその後も変わらずに現在に至っているのではないかと思われる。

2　100冊の概観

本誌の構成としては記事（論文、報告、座談会など）、論壇（巻頭言）、随筆、挨拶（年頭や交代時）、コスト研からのお知らせ等からなっているが、100号までの総タイトル数は1,327であり、１号当たりの平均では約13である。ただし、当初20号までの平均は10タイトルだが、直近20号の平均は15タイトルと増加している。総頁数も当初20号までの平均は63頁だが、直近20号の平均は90頁でＢ５判からＡ４判に変わっていることを考慮すると、字数換算では約1.7倍に増加している（図１）。

記事（論壇、随筆、挨拶、お知らせを除く）の内容を分析するために、カテゴリーを「１　行政に関するもの」、「２　積算やコストに関するもの」、「３　建築生産に関するもの」、「４　入札・契約に関するもの」、「５　技術に関するもの」、「６　海外情報」、「７　その他」に分類してみる。もちろん複数のカテゴリーの性格を持つ記事も多いが一番関連が強いと思われるところに当てはめている。最も多いのは国などの動きを紹介する行政関係、次がコスト研のメインの対象である積算やコストに関するものでこの二つが半数以上

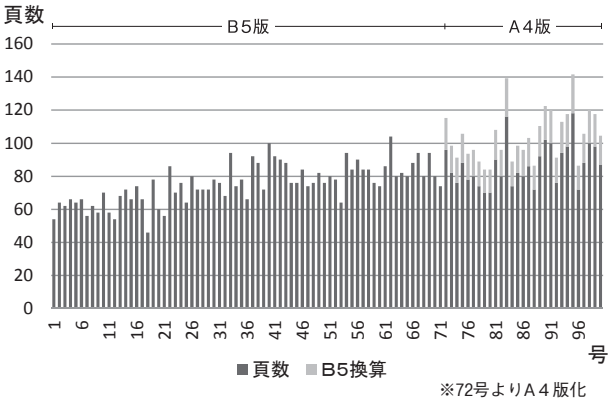

図１　各号の頁数

を占めている。コストのベースとなる建築生産関係や、積算と関連の深い入札･契約関連の記事が多いのは当然だが、海外に関する情報が多いのは本誌の一つの特徴かもしれない（図２）。

座談会や対談など複数の者によるものを除き、執筆者の属性から、「１　学識経験者」、「２　国や地方公共団体」、「３ コスト研等公的団体」、「４業団体」、「５　民間」に分類してみる。最も多いのは国、地方公共団体の職員で、記事で行政に関するものが一番多いのと軌を一にしている。公的団体の職員や学識経験者が多いのも記事のテーマとの関連が強いのが理由と考えられる（図３）。

以上のような記事のテーマや執筆者の構成がやや堅いと思われている本誌の基本的な性格の背景となっているとも言えよう。

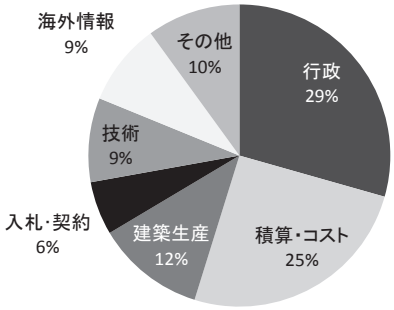

図２　内容別

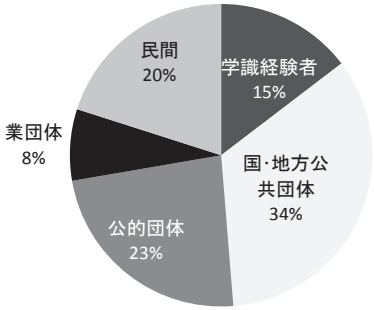

図３　執筆者別

３　特集

機関誌の編集方法として時宜を得た話題について特集を組むという手法があるが、本誌においては37号で「屋上緑化」を取り上げたのが特集と銘を打った最初である。以来100号までで46回の特集を組んでいる（表１）。

表１　特集記事タイトル一覧

号	特集タイトル
37	屋上緑化
38	リニューアル
40	土壌汚染対策
41	コスト縮減
42	多様な発注方式
43	建設産業におけるITの活用
46	今後の建築積算のあり方ーユニットプライス型積算方式の検討が進められる中でー
51	環境「建設リサイクル」
54	PFI事業の現状と課題
55	建築コスト管理の取組み状況について
57	公共工事の品質確保に向けた取組み
58	公共工事の品質確保に向けた取組み（その２）
59	環境とコスト
61	建設資材調達の現状について
62	建築界における人材育成と技術力伝承について
63	改修工事の現状と課題について
65	BIM（Building Information Modeling）
66	建築工事における共通費（共通仮設費及び現場管理費）について
67	建築工事の「数量」
68	建築生産における高度化の取組み
69	米国における建築積算の動向
70	PFI事業の最新動向について
71	建築工事の紛争の未然防止と解決
72	公共建築物等における木材の活用
73	建築統計について
74	英国における建築積算の動向
75	設計段階におけるコスト管理の取組みについて
77	建設労働者に関する保険
78	アジア諸国における建築積算の動向
79	建築コスト管理システム研究所20周年（20年史より抜粋）
80	建築コスト管理システム研究所20周年　記念講演会・シンポジウムの概要
81	東日本大震災からの復興と防災対策
82	BIMの現状と今後の展望
83	欧州の建設事情に関する調査
85	建築物の耐震化
86	公共建築工事の円滑な施工確保に向けて
87	環境・エネルギー対策の推進に向けて
89	市場単価方式の過去・現在・未来
90	１　中東の建設事情に関する調査 ２　公共建築工事における品質確保の促進に関する取組みについて
91	建設業の技能伝承と人材育成
93	建築工事の工期設定から見えてくるもの
94	東南アジアの建設事情に関する調査
95	IT系から見た建築生産システムの現状と課題
97	公共建築工事の発注者の役割と連携について
98	建築積算のあゆみ
99	建築コストと海外市場

特集のテーマもその時代を反映しており、2000年代には環境関係のテーマがいくつか見られる。最近は建設業の人材育成に関する話題や、コスト研が海外調査に取り組んでからはその報告が特集に組まれている。ただ、コスト研のメインの研究対象である積算やコストに関するもの、建築生産に関するもの、入札･契約に関するものについては繰り返し特集が組まれている。テーマに関しての焦点の当て方はその時々により異なるものの、記事のボリュームからいっても特集の内容は本誌による情報提供の主要部分を構成していると言えるだろう。

4　座談会、対談、インタビュー

創刊から10年程度は座談会や対談の多さが目につく。初代編集長の清水氏もとかく堅い中身になりがちなので読みやすさを狙った意味があると言っているし、二代目編集長の照井氏も座談会は頁を稼ぐには効果的という実務的利点のほかに過去の経緯や、その時代の直感的な意識を整理するためには意義が大きいと述べている。実際27号から４回連続で行われた「営繕積算の50年」の座談会では、戦後建設省が設置された当時の積算担当者の貴重な体験談も含めて積算に携わってきた人たちの本音が収録されている。28号に掲載された益田重華氏に対するインタビューは建設工業経営研究会の実務責任者として戦後の建築積算の確立に大きな足跡を残した氏の考えを直接伺った貴重な記録である。

また、国土交通省官庁営繕部長の交代後には新部長に対するインタビューが行われており、公共建築積算やコスト管理に関する官庁営繕部の施策の方針や今後の方向性を知る機会となっている（表２）。

5　連載

本誌では創刊当初から多くの連載記事を組んでいるが、その主要なものについて述べたい。創刊号から始まった連載として「海外積算事情報告」がある。これはコスト研設立の根拠ともなった海外調査の結果を国別に対比して分かりやすくまとめたものである。また、２号からは「公共建築工事積算体系再構築の必要性」として、これもコスト研設立に至る背景と経緯について説明したものであり、設立初期の連載としては必須のものであっただろう。

４号から始まった「入札あれこれ」は初代理事長の古川修先生が直接執筆されたもので、2005年

表２　座談会

号	タイトル	参加者
3	ヨーロッパにおける建築工事の動向について	調査団メンバー
8	新春に語る	照井官庁営繕部長、古川理事長他
12	建築コスト管理の在り方について	照井官庁営繕部長、古川理事長他
16	コストに関する現状と課題	田村官庁営繕部長、古川理事長他
20	公共事業新時代に積算が背負うもの	田村官庁営繕部長、長倉日積協会長他
26	「入札あれこれ」を終了して	古川理事長、執筆メンバー
27	営繕積算の50年［１］	元積算担当者
28	営繕積算の50年［２］	元積算担当者
29	営繕積算の50年［３］	元積算担当者
30	営繕積算の50年［４］	元積算担当者
30	古川前理事長を偲ぶ	照井元官庁営繕部長他
37	市場単価を語る	徳永明治大学名誉教授他
38	設計者からコストを語る	寺本国交省官庁営繕部建築課長他
40	機関誌「建築コスト研究」を振り返って	清水初代編集長、照井二代編集長他
43	「公共建築の日」に期待する	川上公共建築協会会長他
60	これからの積算とコスト管理を語る	藤田官庁営繕部長他
66	官民の積算における現状と課題	官民の積算担当者
79	市場単価・RIBC・コスト管理・未来	国交省官庁営繕部計画課田村補佐他
92	積算と女性	積算担当の女性技術者
99	建築コストと海外市場～これまでの調査を踏まえて	建築コスト管理研究会メンバー他

末の談合決別宣言から10年以上前の時代背景では研究対象とされにくかった入札について、外国の研究や事例等も交えて分かりやすく解説したもので注目を集めた。外国の総合評価の事例や確率論による入札戦略などが紹介され、WTO政府調達協定などで入札契約制度の大転換期にあった発注関係者にとっても貴重な情報であったと思量される。11号の第７回までは古川理事長が執筆されたが、その後体調を崩されて中断し、14号の第８回からは古川理事長を囲む勉強会のメンバーにバトンタッチされて第16回まで継続し､26号では「『入札あれこれ』を終了して」という座談会が古川理事長も参加して開かれている。

11号から14回にわたって掲載された、武蔵工業大学（現東京都市大学）の江口禎先生の「積算単価に関する考察」も幅広い視野から様々な角度で積算単価を掘り下げたもので、とかく定型思考に陥りやすいテーマを立体的に見ることのできる連載であった。折しもコスト研で市場単価方式導入に関する検討が進められていた時期に重なっており、その理論的な根拠を与えたり逆に陥りやすい欠陥についても指摘するなど、市場単価方式の検討に大いに参考とされるものであった。

42号から始まった「設計とコスト」は「入札あれこれ」の第８回以降を担当した現在の建築コスト管理研究会メンバーが持ち回りで執筆したもので、研究会において設計とコストというテーマで俎上に載った課題について14回にわたり連載された。

64号からは「設計とコスト」を引き継ぐ形で「建築コストをめぐる話題」として、テーマをあまり限定せずに建築コスト管理研究会メンバーがその時々の問題意識に基づいて持ち回りで執筆しており、本号で既に26回を数え継続中である。

以上の連載「入札あれこれ」､「積算単価に関する考察」､「設計とコスト」及び「建築コストをめぐる話題」についてはコスト研のホームページから閲覧が可能となっている。

少し肩の力が抜けるような連載としては、歴史物として私財を投じて高瀬川を開削した「角倉了以の世界」（宮田章元編集企画委員長執筆）、建築コスト管理研究会メンバーの遠藤和義工学院大学教授がミュンヘン滞在中に執筆した「ミュンヘンだより」、連載と冠されてはいなかったが民間から出向しているコスト研職員が執筆した「建築工事の素朴な疑問」などがあり、論文中心の堅い雑誌に彩りを添えている。

現在継続中の連載としては、前述の「建築コストをめぐる話題」のほか、コスト研の岩松準総括主席研究員による「建築コスト遊学」と寺川鏡参事による「積算⊂原価計算⊂建設業簿記⊂工業簿記⊂商業簿記⊂会計学」がある。前者は遊学という言葉が示すように、建築コストに関係する通常知らない話、面白い話などが興味深く読めて知識の幅が広がる連載で34回を数えている。後者は積算という、ある意味で閉鎖的な狭い分野を簿記や会計との関連づけから他分野との比較や見える化を図って近代化のヒントを探ろうというもので、独自の視点からの考察が続けられている（表３）。

表３　主要な連載記事

号	回数	タイトル	執筆者
１～６	６	海外積算事情調査報告	調査団
２～７	６	公共建築工事積算体系再構築の必要性	高仲建男（建築懇談会委員）
４～24	16	入札あれこれ	古川理事長他
11～33	14	積算単価に関する考察	江口禎武蔵工大名誉教授
42～63	14	設計とコスト	建築コスト管理研究会メンバー
60～	34＊	建築コスト遊学	岩松準コスト研総括主席研究員
64～	26＊	建築コストをめぐる話題	建築コスト管理研究会メンバー
70～78	９	角倉了以の世界	宮田章（元編集企画委員長）
77～	24＊	積算⊂原価計算⊂建設業簿記⊂工業簿記⊂商業簿記⊂会計学	寺川鏡コスト研参事
81～84	４	ミュンヘンだより	遠藤和義工学院大学教授

＊は継続中

6　新技術調査レポート

新技術については、早い時期から単独記事あるいは「新技術とコスト」というシリーズで本誌として積極的に紹介してきたが、45号からはコスト研内に設置された「新技術調査検討会」によって一定のルールに基づいて選定された新技術について「新技術調査レポート」として毎号紹介されている。新技術のテーマは公共建築においてニーズの高いものを選定することとしており、現在までに建築19件、電気16件、機械17件の計52件の新技術が報告されている。

7　論壇、随筆

創刊当時から毎号続いているものとして論壇と随筆がある。

論壇はいわゆる巻頭言に相当し、有識者の方にお願いし見開き２頁に自由に識見を述べてもらうもので、当初は１人２年間連続で執筆いただいていたが、途中からは数名の方に持ち回りで書いていただいている。

随筆は本誌の編集企画委員にお願いして持ち回りで書いていただいているもので、趣味や健康の話、生活の上でのモットーなど比較的堅い肩書きの人たちの等身大の姿が垣間見られるもので癒しのコーナーになっているのではないかと思う。

8　その他

内容のほかに本誌の体裁についても触れておく必要があるだろう。

まず、表紙のデザインについては、当初は写真が大きく占めていたが、17号からは写真が小さくなり、余白の占める割合が大きく現在の表紙デザインの原型となっている。表紙を飾る写真も当初は抽象的、イメージ的なものが多かったが47号からは世界遺産シリーズとなり、プロの撮影した建築写真を使っていた。73号からはコスト研職員による写真を表紙に使用しており、やや手作り感のあるものになっている。

大きさは当初はＢ５判であったが、多くの機関誌などがＡ４判に切り替わる中、本誌も72号からＡ４判に替えデザインも現在の形に一新した。また、同時に記事のカラー化も行い特集記事についてはすべてカラーとしている。

また、一般の方の利便のためホームページから記事が閲覧できるようにもしており、現在65号以降の特集記事、連載のうち「入札あれこれ」、「積算単価に関する考察」、「設計とコスト」及び「建築コストをめぐる話題」、「新技術調査レポート」については閲覧可能となっている。

以上、「建築コスト研究」100号を機に本誌のこれまでを振り返ってみたが、やや堅い内容ではあるが建築コストという特定の分野では大きな足跡と蓄積を残してきたのではないかと改めて感じている。本誌の表紙裏にはコスト研のビジョンの説明文として「建築コストに携わる方々に的確な情報を提供し、分かりやすい情報を社会に向けて発信する」と述べられているが、本誌が少しでもその役に立てるように編集企画担当として今後も努力していきたいと考えている。